

遠い未来に漠然と役立つのが学問 想定外の問題をどう乗り越えるか 自力での対処を考えるための訓練

2 知の体力



永田 和宏

一步先のあなたへ

私たち研究者も、ときにプレスリリースというものをすることがある。新しい成果が出て、一般の人々にも知ってもらいたいと思われるような、社会的インパクトの強い発見などがあった場合である。

その場で必ず質問されるのは、その研究がどんな役に立つのかという点である。公の研究費を使ってなされる研究であれば、それがどのような役に立つかを尋ねられるのは、当然のことではある。

しかし、何かをやる時、あるいはやったとき、すぐにそれが何の役にたつかを考えると、思考パターンについては、私はしゃっかんの疑問を持っている。それ以上に、何かをやるときはその効果、効用、あるいは見返りがあるはずだという考え方そのものへの疑問であると言ってもいいかもしれない。

勉強について、それはより顕著であろう。勉強しなさいと言われる。なぜ勉強しなければならぬのか。それは、いい成績をとるため、というのがもっとも端的な答えであろう。期末試験や模擬試験でいい点数をとるため、偏差値の高い大学をめざすため、入試に合格するため。ため、ため、ためと、目的の目白押しである。そういえば「しっかりと目標を立てて勉強を

しなさい」などという言葉も、耳にタコができるくらい聞いた覚えがあるだろう。

勉強をするための動機付けとして、いつもこの「のために」というフレーズがついてくる。あるいは逆に、勉強をしななければ「のために」の部分の実現できないよという脅しとしても使われるだろうか。「勉強しな」といい大学に入れませんよ。



わかりやすい動機づけであり、脅し文句である。しかし勉強というものは、大学に入ってしまったら終わりというもので、まあは終わりとはいくも、もちろんない。むしろ、高校を卒業してからの、本当の勉強であるとも言えるのである。

ところが、勉強があまりにも目的と対になって身についてしまったために、大学に入ったとたん、学ぶというこの意味と意義を失ってしまう学生が多すぎるように思うのである。本来の勉強というものは、あるいは学問というものは、何か

のためにするものではないだろう。具体的に何かを解決するためにという目的のはっきりしたものは学習であり、学問とは学んで問うもの。何かの解決のためのものではないかと思いたい。具体的な問題の解決のために勉強もあっていいが、具体的な目標を設定しない、もっとはるかに遠い未来に漠然と何かの役に立つ勉強もあり、それが学問というものである。

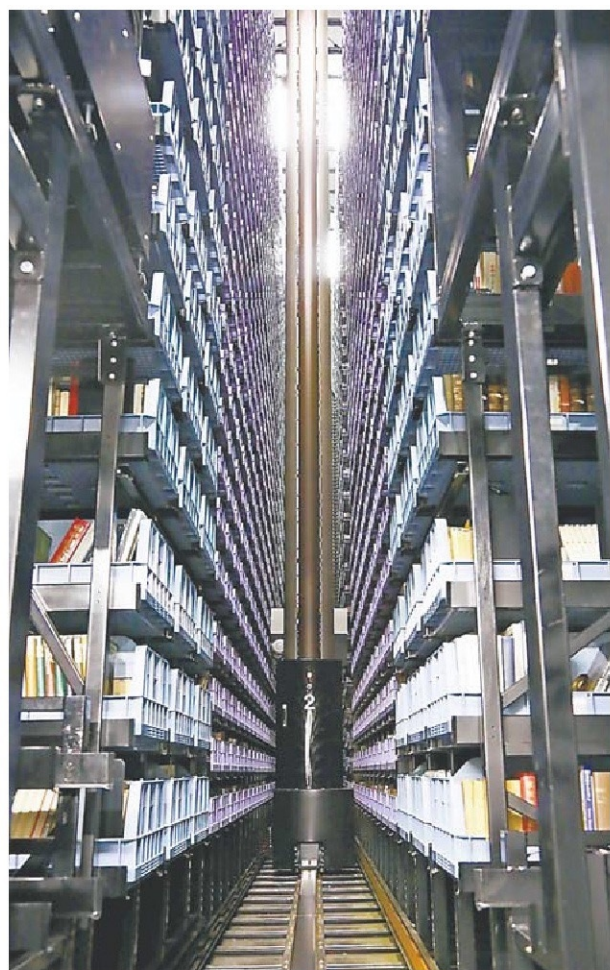
これから自分が生きていくとき、何が起るのかは、現在の時点でもまだ誰にもわからない。東日本大震災のとき、原発事故が起った。そこでは「想定外」という言葉が頻りに用いられた。



私たちのこれからの時間、将来の人生に起こることは、すべて想定外のことなのである。想定外の事態を、なんとか自分だけの力で乗り越えていかなければならない。生きるとはそういうことである。

運動をするにはそれなりの体力をつけなければならないのと同様に、これから何が起るか分からない「想定外」の問題について自分なりに対処するためには、それなりの体力が要求される。私はそれを「知の体力」と呼んでいる。

それは知識の習得である以上に、どう考えればその場を乗り切れるのかという、考え方の訓練なのである。「自分ならどう考えるか」といふときに、それまでに先人たちがどのように考えてきたかを学ぶことは、具体的に何かの役に立てるといふ勉強以上に重要な意味を持っている。



考える

京都産業大教授(細胞生物学)、歌人